

---

第14回夏期セミナー（1992年7月4日）第1日

## 美と醜の悲劇 ——『サロメ』と「王女の誕生日」論——

堀内正子  
(昭和薬科大学助手)

三島由紀夫をして「私は最初に文学に飛び込んだときから、オスカー・ワイルドの『サロメ』というような戯曲、殊にそれについていたピアズレーの挿絵などに魅せられた」と言わせた一幕劇『サロメ』は、あらゆる点でワイルドの代表作と言えよう。

古来よりさまざまに変化を遂げて来た‘サロメ’は、19世紀の男性優位の文化潮流の中にあつて究極の刺激を求める男達によって運命を狂わせる女としての色彩を濃くして行った。‘サロメ’をその母親から完全に分離し、自由意志を与えて独立させたのはワイルドである。『サロメ』の構想は大学生の頃より彼の頭を掠めていたようだが、完成を見るのは37歳になってからである。その間、詩や悲劇、小説や童話などが執筆され、講演や編集が行われた。

『サロメ』執筆以前の4年間にすべて書き終えられた9編の童話は、愛・死・美・醜といったテーマや、単純できらびやかな言葉のリフレイン、象徴的な言葉、絵画的な情景など、『サロメ』と共有する多くの特質を持っている。中でも「王女の誕生日」に登場する主人公である12歳の王女の中に、私達は運命を狂わせる女、‘サロメ’の萌芽を見ることができよう。

醜い小人の美しい王女への恋を扱った「王女の誕生日」（以下「王女」と略す）と、『サロメ』を対照して美と醜それぞれの悲劇について考察する時、上記の事は明らかになると思う。

それぞれの筋が展開される場所は、前者が太陽がきらめく御苑、テラス、庭、宮廷内部であるのに対し、後者は、月が覗く宮廷の広いテラスとそれに連なる宴会場となっている。時間的にはどちらも半日を要していない。この短時間の間に両者共に愛が芽ばえ、死が訪ずれる。

王女は、王が愛しすぎたが故に幼き王女を残して短命で世を去った母に瓜二つの美しい娘に育った。父王が娘を見る時亡き妻王妃の姿が重なり合い彼の心を激しく乱す。いささか近親相姦的な臭いも漂って来るようだ。王女の無垢なる美は、王にとっては不安と悲しみの種であり、だが王女自身が父王の愛を受けられぬという意味でその状況は悲劇的である。

---

サロメは王妃の連れ子で、義父である王は実は王妃を手に入れんが為兄王を亡き者にしている。寄る年並みに若き頃を恋慕するのか王は王妃の隣席にもかかわらず、執拗に姪であり娘である王女に近親相姦の目を注ぐ。

王女の誕生祝いの余興が盛大に行われていたが、意外にも彼女の心を捕えたのは風変わりな醜い小人の身の程知らずの踊りだった。そして、小人はといえちこちも誰に対しても決してむごい事などされぬはずと思わせるほどの美しさにすっかり魅了されてしまった。

サロメの美しさに若きシリア人は清楚で純白の処女のイメージを抱いたが、それがヨカナアンを恋して大胆であられもない娼婦のイメージに変わる時、己を守るがごとく彼は自刃して果てる。エロドが催した酒宴は、サロメにとって大人達のくだらぬ議論と喧しい馬鹿騒ぎ、酔っぱらいの醜体で満ちたもので、耐えかねて出て来たテラスで彼女はヨカナアンの聖なる声と出会い初めての恋に落ちる。それまで追われる者であったサロメも、退けられる度に心は熟し情念に目覚め追い求める者になって行く。

小人が暖かで優しい森とは正反対の冷たく華麗な宮廷で自分の真の醜い姿に出会った時、彼は王女の本心を悟り叫び声をあげ、すすり泣きながら絶望の内に息絶えた。それさえも王女達には大笑いをもたらすリアルな芝居に映っていた。実に皮肉なことである。

サロメは嫌らしいエロドの為に舞を舞って恋しいヨカナアンの首を手に入れる。「死の秘密より大きいのが愛の秘密」と告白し、その口に口づけするサロメにエロドは死を宣告する。

美あるいは醜は、美が稀で、醜が珍奇であればあるほど、人はたやすく心を奪われてしまう。美は、人に憧憬を抱かせ、五感を刺激して行動を起こさせる。醜は、人に好奇を抱かせ、五感を刺激して行動を起こさせる。人が、外に現われる姿を見て内なるものを規定するとすれば、それは悲劇と言えないであろうか。

サロメの美しさは、二人の男の血を吸って大輪の花を咲かせ、一人の男の復讐によって一瞬にして散った。王女の美しさは、まだまだつぼみで、醜い小人の死もその花びらを少しばかり揺ったに過ぎないが、王女が小人にかけた好奇が方向を転じて憧憬に向かう時、私達は、そこにもう一人のサロメを見ることになるであろう。

